

梅棹忠夫先生を偲ぶ

安田 喜憲

一 日本人に勇気と希望を与えた文明の生態史観

二〇一〇年七月三日、梅棹忠夫先生がお亡くなりになった。享年九〇歳だった。

梅棹先生の数ある学問の中で、私がかつとも大きな影響を受けたのは、「文明の生態史観」だった。

私は一九八〇年にはじめての著書『環境考古学事始』（日本放送出版協会、一九八〇年）を上梓したが、その環境考古学の基本思想となったのは、梅棹先生の「環境と人間の相互関係のなかから人類文明史をみなおす」という生態史観だった。

日本人は第二次世界大戦の敗戦で大きく自信を喪失した。欧米

のものは何でも正しい、横書きのアルファベットで書かれたものは、縦書きの日本語で書かれたものよりも正しい。日本人の歴史を解釈するにも、ヨーロッパの畑作牧畜民の風土で育ったマルクスと言う人が考えた歴史観を適用することの方が優れているとされていた。

梅棹先生が「文明の生態史観序説」（『中央公論』一九五七年二月号）を発表したのは、「マルクスを信奉する人でなければ人にあらず」とまで言われた時代、なにかもが欧米一辺倒で日本人が完全に自信を喪失していた戦後間もない一九五七年のことだった。

「文明の生態史観序説」を発表されたのは、アーノルド・J・

トインビーという偉大なイギリスの文明研究家が来日された翌年のことである。一九五六年のトインビーの来日は梅棹忠夫先生にも大きな影響を与え、「文明の生態史観序説」を書く上で大きな刺激になったことは確実である。「トインビーという人がやって来た。「中略」わたしは、トインビー説には感心はしたけれど、改宗はしなかった。」というこの有名な一文からはじまる『文明の生態史観』（中公叢書、一九六七年）は、日本の比較文明学を創設する契機になった。梅棹先生はトインビーの説には感心したけれど、「東洋人が、日本人がかんがえたら、もうすこしちがったふうにかんがえる」と日本人の目で見たユーラシア大陸の文明論を展開したのである。

ユーラシア大陸を楕円に見立て、東端に日本文明を、そして西端に西ヨーロッパ文明をそれぞれ第一地域として位置づけ、「生態史的に見たら日本文明は西欧文明と同じ第一地域の文明に相当し、生態系から文明系への遷移が順序よく進行し、両者はともに類似した並行進化をとげている。決して日本文明は西欧文明に遅れをとっていない」と指摘したのである。

これは敗戦で自信を喪失していた日本人に大きな勇気を与え、それに続く高度経済成長期を生み出す原動力になった。

二 畑作牧畜文明の破壊性と暴力性を予言

梅棹先生の大好きだったフィールドはモンゴルの草原だった。その草原において、牧畜民の暮らしがどのようにして誕生したか、先生はきわめて卓越した結論を出されている。

牧畜は、バターやチーズをつくる乳利用の技術と、群れを安定させるための去勢の技術を確立したことによって可能となったと指摘したのである（梅棹忠夫『狩猟と遊牧の世界』講談社学術文庫、一九七六年）。

しかし「文明の生態史観」では、このモンゴルは第二地域に位置づけられ、そこは「悪魔と暴力の巣でもある」とも指摘された。

こよなく愛されたモンゴルの風土を、なぜ梅棹先生は「悪魔と暴力の巣」と呼んだのか。私には謎だった。かつて私は、そのことを厳しく問いかけたことがあった（安田喜憲『文明の環境史観』中公叢書、二〇〇四年）。

自分が愛したフィールドを「悪魔と暴力の巣」と呼べるだろうか。同じフィールド・サイエンティストとして私は理解できなかったのである。

確かに、第二地域には破壊と暴力を繰り返した帝国が出現し

た。しかしそれだけではなかった。梅棹先生がこの第二地域を「悪魔と暴力の巢」と指摘したことには、もつと奥深い意味があったのだ。それが、私の環境考古学の研究が進展するなかで、わかってきた。

それは、家畜を飼うライフスタイルが、世界中の森を食いつぶし、生態系の破壊を推し進めたことが明らかとなってきたからである（安田喜憲『山は市場原理主義と闘っている』東洋経済新報社、二〇〇九年）。

ヒツジやヤギ、それにウシやウマを飼い、ミルクを飲んでバターやチーズをつくり肉を食べる牧畜が、麦を栽培してパンを食べる農耕とセットになった時、人類はきわめて生産性の高いライフスタイルを獲得できた。それを畑作牧畜のライフスタイルと呼ぶ。

そして文明もこの生産性の高い畑作牧畜のライフスタイルから生まれたのだと長らく信じられてきた。メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明、黄河文明という四大文明と呼ばれるものは、いずれも畑作牧畜民がつくった文明である。

ところが、この牧畜と畑作が結合した畑作牧畜文明はひとつの闇を持っていた。メソポタミアから始まり、地中海、そしてヨーロッパからアメリカへと拡大した畑作牧畜文明は、世界中の森と

いう森を破壊し尽くしたのだ。

つまり、タンパク源の家畜が森を食い荒らしたのである。森の破壊は、森の中に暮らす幾千、幾万という生きとし生けるものを奪うことであり、水の循環系を破壊することでもあった。例えば、タンパク源の家畜であるヒツジは緑の草原を貪り食う。メーデーというかわいい鳴き声とはうらはらに、まるで人の生き血を吸うシラミのように、昼となく夜となく絶えず大地を貪っているのである。

また、この畑作牧畜文明下において、貧しい人間は悲惨だった。貧しい人間は奴隷として家畜のように酷使された。つまり奴隷制度もまた、人間を家畜のように酷使する、この畑作牧畜文明の中で生まれたと言える。宦官も、去勢の技術を身につけた畑作牧畜民の文明のシンボルである。稲作漁撈民の文明からは奴隷や宦官は生まれなかった（安田喜憲『日本よ森の環境国家たれ』中公叢書、二〇〇二年）。

このような畑作牧畜文明の中から生まれたヨーロッパ文明は、一八世紀になると化石燃料に手をつけ、現地の人々を家畜以下の扱いで酷使するという植民地支配と、地球環境の破壊とを加速度的に推し進めた。

さらにこのヨーロッパ文明の延長に発展したアメリカ文明が生

み出したのが、現代の地球を覆う市場原理主義であり、金融資本主義である。

この市場原理主義と金融資本主義が、現在の地球環境の破壊を強烈に暴力的に推し進めているのだ。そしてその破壊性と暴力性は、家畜を飼う牧畜に由来していると私は考える。

梅棹先生はその牧畜民の破壊性と暴力性を敏感に感じ取っていたがゆえに、こよなく愛したフィールドではあるが、そこを「悪魔と暴力の巣」だと呼ばれたのであろう。梅棹先生は、牧畜民の文明の破壊性と暴力性を予見していたのだ。

三 梅棹学の原点には山がある

梅棹先生のフィールド・サイエンスの原点は山にある。

『梅棹忠夫著作集 全二二巻』（中央公論社、一九八九―一九九四年）をはじめ膨大な著作を残された梅棹先生の最新のアイディアや関心は、フィールドワークをしているときに生まれた。他人が本の中で言っていることではない、フィールドに出て自分の目で確かめ、自分で考えたことこそが本物だという考えを貫いた。京都一中、三高そして京都大学と一貫して山岳部で活動し、そこで培った人脈やノウハウが、梅棹先生のフィールド・サイエン

スの根幹を形成しているのである。

今西錦司氏、西堀栄三郎氏、川喜田二郎氏、中尾佐助氏、四手井綱英氏、吉良竜夫氏、藤田和夫氏、河合雅雄氏といった、後に京都学派と呼ばれる人々の交流に支えられたフィールド・サイエンスの大きな潮流は、山での探検を通して形成されたのだ。

さらに、梅棹先生は新聞社やテレビ局、出版社といった、ジャーナリズムの人々との交流も大切にしていた。

現在ではようやく、新聞やテレビに出ることがアカデミズムの世界でも評価されるようになったが、当時のアカデミズムの世界ではジャーナリズムとの交流を低くみる風潮があった。

しかし梅棹先生はそのジャーナリズムとの交流の中で、象牙の塔にこもっていたアカデミズムの世界を庶民にも開放したのだ。

梅棹先生は情報文明の時代になることを早くから予言していたが、時代はまさにそのようになった（梅棹忠夫『情報の文明学』中公叢書、一九八八年）。

梅棹先生の訃報と関連する記事は新聞各社によってとりあげられたが、これほど大きくかつ何回にもわたって追悼文が掲載された人を私はかつて見たことがない。それは、梅棹先生の残した業績の巨大さとともに、ジャーナリズムとの深い関わりを物語っているとと言えるだろう。

梅棹先生は国立民族学博物館を一九七四年に創設するが、その研究所を創設するための実務能力もまた、登山のエキスペディヨン（遠征）から体得した。登山は、費用の調達から始まり、ルートの設定や天候にあわせた臨機応変な対応など、リーダーの適確な判断力と実務能力が必要である。つまり、山が梅棹学をつくったといってもよいのではないか。いや、山が梅棹先生という天才を通して、日本を守り地球を守る文明学をつくらせたのだ（梅棹忠夫『研究経営論』岩波書店、一九八九年）。

山をこよなく愛した梅棹先生。山を崇拜したのは稲作漁撈民である。畑作牧畜民は山にヒツジやヤギを放牧して、山を丸裸にしてしまった。ところが稲作漁撈民は山を神の存在するところ、死んだら帰るところと信じていた。なぜなら、稲作には水が必要不可欠である。その水を生みだすのは山である。だから稲作漁撈民は、山の木々を大切にし、森の中の生きとし生けるものを守って、ともに暮らす道を選んできたのである。

山を崇拜する心は、遠く縄文時代にまでさかのぼる。日本人の心の原点には山がある。その山の力が梅棹学の原点だった。

その意味において、梅棹学は、山を丸裸にする欧米の畑作牧畜民の学問ではなく、山を崇拜する稲作漁撈民の、日本人の学問であると言えるのだ。

四 権威主義の排除

梅棹先生は、若い人に自宅を開放し「金曜サロン」を開催したり、「近衛ロンド」と称する研究会で若い研究者の育成にあたられた。そのなかから、民族学や文化人類学の優秀な研究者が輩出した。そうした若い研究者の研究の拠点として、一九七四年に国立民族学博物館を創設した。

京都や大阪の上方の学問は、天才的な個人が特に際立ち、その人を中心として研究所ができるという場合が多い。梅棹先生の国立民族学博物館、今、私の所属している梅原猛先生が創設した国際日本文化研究センターがその例である。ここが東京と異なるところであるだろう。

上方では東京よりも、「梅棹忠夫先生の研究所」、「梅原猛先生の研究所」というように、個人が前面に出ることが多い。それは、上方の学問が特定の篤志家とくしの旦那を中心に行われてきたという伝統もあるだろうが、なによりも上方の地理的条件がそれを必要不可欠のものにしている。

関西にいる学者は、東京にいる研究者の何十倍もの努力をしないと、なかなか政治家や官僚に認めてもらえない。自分の理想とする研究所を創設するには、個人が一際輝いて、またそうした光

り輝く人でなければ研究所は創設できないのだ。それゆえ、関西で研究所をつくった人の学問は本物であり超一流である。

梅棹忠夫先生や梅原猛先生は、一〇〇〇年に一人出るかどうかの偉大な天才的学者であると私は思っている。

「学は人なり」という、よき京都学派の伝統は今後も継続していただきたいものである。

梅棹先生は権威というものを嫌った。学者の傲慢をいましめ、自分への批判に対しても謙虚だった。

梅棹先生の創設した国立民族学博物館は「がらくたの博物館」だと自らおっしゃっている。つまり、梅棹先生がこの博物館に求めていたのは、庶民が日常的に使っていたような、生活用具を展示することであり、権力を手にし、文明をリードしてきた王侯貴族たちの集めた金銀財宝を展示することではない、ということである。権力者の陰で、地道に暮らした人々の生活の遺産の中に、文明の輝きを発見したのである。

レヴィ・ストロース氏やトインビー氏は未開の地の中に文明を発見したが、梅棹先生は王侯貴族ではなく、日常の庶民の暮らしの中に文明の光を見出したのである。それができたのは、権威あるものを求めなかった梅棹先生の人としての生き様があってこそである。

西洋のレヴィ・ストロース氏やトインビー氏に匹敵するのは、東洋では梅棹忠夫先生や梅原猛先生だと私は思う。

五 高齡化社会を生きる模範

梅棹先生は六五歳の時に、中国の西安あたりでひろったウイルスがもとで、失明される。それは研究者として、フィールドワークとして致命的なことであった。梅棹先生の遺言のひとつは「中国に深入りしてはならない」ということであったが、自らを失明に追いやった原因が、中国でひろったウイルスにあるというのはいかにも皮肉である。

しかし梅棹先生はそれにも屈することなく、研究を続けた。お弟子さんたちが八八歳の米寿の記念に編集された梅棹先生の著作目録（『梅棹忠夫著作目録（一九三四―二〇〇八）』国立民族学博物館、二〇〇九年）を見ると、六〇歳までに書かれた業績よりも、その後の二八年間に書かれた業績の方が多いためである。

高齡化社会を迎える日本にとって、梅棹先生の生き方は私たちにとってひとつの模範となるだろう。

一九九七年、梅棹先生は目が見えなくなってから久しぶりにモングルを旅している。

「草原の景色はみえなくても、かぐわしい草のかおりを胸いっぱいには吸い込んだ」と述べている（梅棹忠夫『行為と妄想―わたしの履歴書』日本経済新聞社、一九九七年）。

目が見えなくなつてからの梅棹先生を支えてくださったご家族や民族学博物館の研究室の秘書の方のご尽力は、並大抵のもではなかったと思う。

梅棹先生は「自分は本当は人間嫌いだ」とおっしゃっていた。どこかのお寺にこもつて読書三昧の日々を送りたかつたのかもしれない。

梅棹先生の魂は今頃、かぐわしいモンゴルの草原を、ヒンゾークシの山肌を千の風になつて吹きわたつていていると思う。時にはラマ教の寺院にこもつて、読書三昧の日々を送つておられるのかもしれない。

「美しい地球を守り、人類の平和と繁栄のために安田くん頑張れ」とエールを送つてくださつているようにも思う。

六 時代は再び梅棹先生を超える天才を必要と している

梅棹忠夫先生という天才的巨人が、第二次世界大戦後の日本の

危機を救つた。

第一次世界大戦の危機の時代に、世界はトインビー氏という偉大な文明論者を西洋の世界に生み出した。そして第二次世界大戦の危機の時代に、世界は梅棹先生という文明論者を東洋から生み出した。

梅棹先生は、かつて日本人に自信と誇りを取り戻させ、生きる力と勇気、そして希望を与えてくれた。

市場原理主義や金融資本主義が蔓延し、中国やロシアが台頭し、日本人が自信を喪失して暗い未来しか見えない現代、この二一世紀の日本の危機を乗り越えるためには、梅棹先生を超えるような天才の出現が待ち望まれるのである。

（本稿は「梅棹忠夫先生を偲ぶ」と題してNHK教育テレビ「視点論点」で二〇一〇年七月一五日放映の原稿として作成したものに追加修正したものである。）